

陰陽ローカル線泣き笑い

23時前の高松駅。今日は一日中雨が降って、やっと止んだけど、ホームもレールも周囲の建物も全てがまだ濡れている。ホームには観音寺行きや琴平行きなど各方面の普通列車が軒を連ねて並んでいる。それぞれ十数人ずつ乗っているようだけど、私の乗っている「マリンライナー68号」は岡山行きの最終のためか、その倍くらいの人に乗っている。倍といっても、30人程度だから混雑はしていない。

毎年この時期は「高松まつり」という催しがあり、本来なら今日が最終日で、総踊りというものがある。しかし、間断なく降り続いた雨のために明日に順延となった。もし、予定通り総踊りが行われていたら、列車もコンコースもこんなに閑散とはしていなかっただろう。

雨で列車は遅れている。「いしづち30号」や「しまんと10号」が7、8分遅れで入ってきた。その影響で、こちらも数分遅れて発車する。

今回（平成15年8月14～17日）は山陰へ出て、広島にいる堀越君宅と下松の楠君宅を^{しんじ}歴訪することになっている。まず岡山から伯備線で米子まで出て、宍道から木次線、芸備線に乗って広島へ行き、堀越邸で一泊する。翌日は山口へ移動して楠君と合流して、やはり夜は楠邸にて一泊。最終日は広島の可部線に乗って、夜高松に帰ることになっている。緊縮財政下での旅行なので、2晩とも友達のお世話になる。

しかし、初日に乗る列車はまだ決めかねている。初日といっても、私の言う初日は今回の場合は、この「マリンライナー」を降りて以降のことで、日程的には今はまだ0日目である。とはいえ、あと数十分で初日を迎える。それなのに、まだ決めていないのである。決めてもないのに、出発しているとはどういうことなのか。

今日は朝から木次線の「奥出雲おろち号」という臨時のトロッコ列車の指定席を買うために3回もみどりの窓口へ足を運んだ。3回目はさっき、「マリンライナー」に乗る前であったが、キャンセルに賭けてみたものの、現実には厳しく指定席は取れなかった。

「おろち号」に乗ると乗らないでは、初日の行程が全く変わってしまう。これに乗る場合^{やえがき}は岡山を2時過ぎに出る臨時夜行快速の「ムーンライト八重垣」でスタートして、9時過ぎの木次線に乗り継げば、15時半頃に広島に着くことができる。しかし、乗れないとなると岡山を6時前に出る米子行きの普通列車でよく、順調に乗り継いで広島には17時頃に到着する。

ところが、困ったことに、翌朝一番の「マリンライナー2号」に乗って岡山へ行っても、上の米子行き普通列車はわずか2分前に出てしまっているのである。

どちらにしても、この岡山行き最終に乗らなくてはどうにもならないところが今回のルート決定で最も苦しんだところだ。しかし、岡山駅で朝まで過ごさねばならない場合のことを考えると、平成13年の春の山陰のときよりも気が重い。岡山に着いてから決めようと思う。

高松を定時に出て、静まり返った高松運転所を通過する。様々な車両が停まっている中10月に登場する新型マリンライナーの姿も見える。今までにないいいかっこいいイメージの車両だけに夜でも目立っていた。うっすらと浮かび上がる鉄仮面のような表情は不気味ですらあった。

こまめに停車して、20分ほどで坂出に停まる。遅れの「いしづち32号」の接続待ちで、10分遅れて発車する。

「お客さん、終点ですよ」

と言う清掃員の声で目が覚める。ウトウトして、手前の大元でも岡山駅に入る最後の右カーブでも一瞬目が開いたけど、寝入ってしまった。駅で起こされるのは随分久しぶりのことである。誰もいないホームに一人降りる。

遅れを取り戻せないまま、到着したようだ。時間は0時半になっている。関西発の九州行きのブルートレインは出た後だけど、岡山駅はちょうど夜行列車の時間帯である。そんな中、寝ぼけ眼で茫然としていたら、急にどしゃ降りの雨が落ちてきた。聞こえてくるのは雨音ばかりだが、本降りなので、かえって耳障りだ。

結局、「八重垣」に乗って、「おろち号」の出る木次まで強行突破で行くことにした。乗れば、広島に早く着くことができるので、1ヶ所や2ヶ所くらい観光はできるだろうし、満席で乗れなくても、木次で2時間待てばいいだけのことだ。それに駅のベンチで不安な気持ちで夜を明かすのにも抵抗があった。

0時25分発の臨時夜行快速「ムーンライト九州」が入ってくるはずなのだけど、一向にやって来る気配がない。ホームには30人ほどが待っている。構内放送で50分の遅れとアナウンスされる。そこまで遅れると、こちらにまで影響が及んでくる。

雨も止んで0時48分、2分遅れで東京行き「富士」がやってきた。数人が乗る。一方の「九州」のホームでは、待ちきれなくてベンチで横になる人も出てきた。

1時頃、再度のアナウンスがあり、遅れの原因は関西地方で起こった人身事故とのことであった。遅れはさらに増幅して60分になっている。でも、あと30分くらいでやってるのが分かったので、待ちわびている人たちには朗報である。私が乗る「八重垣」ももう到着する時間になっているので、「九州」同様遅れは免れないけど、岡山で1時間20分ほどの停車時間があるから、60分程度の遅れなら停車時間を調整して定時に戻せることができる。こちらは問題なさそうだ。

しばらくすると、1時20分頃に「八重垣」のほうが先に入ってきた。14系客車の4両編成に回送らしい寝台車が1両連結されている。数十人は乗り込んだようだ。これで窓際の席はほぼ埋まった。私も席は確保できたけど、あいにくデッキ脇の席なので、人の往来が激しくあまり落ち着かない。

その5分後に「九州」がやっと到着した。待っていた人たちの表情は疲労の色でいっぱい。その周りは元気というか狂気というか三脚にカメラを持った鉄道ファンらしい人が走り回っていて、「九州」の前に群がっている。いつ旅に出ても、夜に昼によくあそこまでやるなど半ば呆れて見ている。私だって列車の写真は撮っているけど、駆けずり回ってまで撮ったりはしない。あくまで風景が専門だから、ああいった人たちとは一線を画しているつもりだが、やっぱり鉄道は好きなので、他人から見ると「目くそ鼻くそ」の類なのだろう。「九州」はすぐ発車していった。

車内が落ち着くと、2時24分の発車を待たずに目を閉じる。家を出る前から眠たかったし、岡山でも起こされたくらいだから、すぐに眠りに落ちる。あとはドアの開け閉めの音や腰の痛みで時折り目が覚めたけど、概ね寝て過ごせた。

ほうきだいせん

5時半頃、車内放送が静寂を破った。列車は伯耆大山の手前辺りを走っているようだ。でも、右手に見えるはずの大山は雲が低く、ほとんど見えない。ただ、空を見る限り、今日は天気がよくなりそうな雰囲気である。のんびりした旅が楽しめそうだ。右手から薄日



が差している。

5時51分、定刻に米子に着いた。夜行明け独特の虚脱感を味わいながら、ホームに降りて体を伸ばしてみる。顔を洗っていないのでさっぱりとはいかないけど、外の空気を吸って少しは気持ちがよくなる。ここでもカメラを持った何人かが「八重垣」の周りに群がっている。

6時11分に米子を出ると、広大な側線が広がっている。かつては所狭しと並んでいたはずの車両も貨車もまばらで持て余し気味の構内はちょっと寂しい。ここ

で持ってきていた朝食のパンを頬張る。

今晚の「八重垣」は揺れがたいへん少なく、ほとんど起きずに済んだ。腕のいい運転手に当たったのだろう。このところ、荒い運転の夜行ばかりに乗ってきたから途中よく目を覚ましたものだが、よほど乗り心地がよかったのだろう。

ひっそりとした安来を過ぎて、荒島を出て間もなく島根県に入ると、右手には中海が広がる。

木次線の分岐駅の宍道に到着したけど、このまま終点の出雲市まで行く。出雲市に行って何かするというわけではない。ただ、宍道で2時間待つか、出雲市まで行って待ち時間を分散させるか、というだけのことだ。

一駅ごとくらいに下り列車と行き違う。出雲市までの間に特急「やくも」と2度の交換を含む5列車との行き違いだ。特に直江ですれ違った快速米子行きは「やくも」の編成を使っており、贅沢な通勤列車となっている。



まだ西や北の空は曇っている。そんな中、高架の松江に到着する。人影はあまりない。地元の用務客も夜を徹して走ってきた終着間近の夜行列車に乗るわけもなく、「やくも」が出た直後とあって閑散としている。松江を出ると右手に黒く聳える「千鳥城」の松江城が見えてきた。そして、宍道湖が広がる。相変わらず大きな湖だ。でも、曇っている所以对岸はよく見えない。

駅名や駅前の雰囲気とは違ってひっそりとしている玉造温泉を出ると、雨が

降り出した。この辺りでこんなに不安定な天気だと木次線に入ると、もっと降りやすい空

模様なのかもしれない。さっき「晴れそ
うな雰囲気」と言ったけど、大丈夫なの
だろうか。晴れているに越したことはな
いけど、山に入るとどうなるか分からな
い。大きな斐伊川を渡る。昨日の雨のせ
いで水量が多い。

7時33分、出雲市着。雨は止んでい
るけど、油断はならない。コンコースや
駅前ひのみさきのバス停には出雲大社や日御崎へ行
く人たちが賑わっていて行列ができてい

る。日御崎灯台は設置されて今年で100周年だそうだ。行ってみたいけど、なかなかその
機会に恵まれないなと思いながら折り返しの列車を待つ。高架とはいっても、外観はコン

クリートのにおいを感じさせない出雲大社をモチーフにした駅舎である。隣接して一畑電
鉄の駅ビルが建っている。2年前に来たときはあんなに大きな建物に全く気付かなかった。



1時間ほど時間があるので、ここで顔
を洗ってさっぱりする。土産を買って、
用事を済ませておく。ただ、昼食に予定
していた駅弁はできるのに少し時間がか
かるらしく、乗り遅れては大変なので断
念する。

高架のホームへ上がる。既に列車は
入っている。米子行きいちばたのキハ47の2両編
成だ。まだ数人しか乗っていないので、
席を選んで座る。発車を待っているうち
に、益田行きいちばたの快速「アクアライナー」
や臨時特急「スーパーおき91号」が相次

いで入ってくる。どちらも乗車率がいい。8時29分、発車。

左手には先ほど見た一畑電鉄のビルから高架の線路が伸びている。駅が立派過ぎる分、
古い車両の多いローカル私鉄にはあまり似つかわしくない光景だ。しばらく併走して分か
れた。

同じ風景が逆から現れてくるだけなの
で、特に何ということもない。ただ、各
駅停車ながら駅間が比較的長いので、か
なりのスピードが出ている。空は相変わ
らずはっきりしない。雨も時折り降って
いる。ますます心配になってきた。8時
46分、宍道着。

木次線のホームには「おろち」号に乗る
と思われる家族連れなどの姿が目立つ。
間もなく、木次方面からキハ120の4両



編成の気動車が入ってくる。さっきまで乗っていた米子行きは8分停車して、特急「スーパーくにびき1号」と交換するはずだったのだが、時間になっても来なかったのだから、先に出てしまった。

それにしても、この4両編成は何かの間合運転なのだろうか。4両のうち3両は回送で客扱いをしているのは1両のみである。これは出雲横田始発の列車なので、木次や宍道方面への通勤・通学列車だと思われる。推測だけど、木次までは4両とも客扱いをしていて、木次で編成を切り離さずに4両のまま宍道までやってきたのだろう。そうでなければ木次線に4両は長過ぎる。ここでその3両を切り離して、1両で木次まで行く。

この車両はロングシートである。山間のローカル線でロングシートでは景色を満足に見ることができないばかりか撮ることもできない。回送車のほうにセミクロスシートの同系の車両があるからそちらに移りたいくらいだ。

結局、「くにびき1号」が来ないまま、上りの「くにびき6号」の乗客だけ受けて9時08分発。木次線は初めて乗って以来、10年ほどのご無沙汰である。そのときの印象はほとんどない、というより全くないと言ったほうが正しいかもしれない。

すぐ山陰本線から離れ、左にカーブして山中に入る。キハ120はJR四国の1000系気動車とエンジン音が似ている。従来では考えられない登坂力だ。速度もあまり落とさずに苦もなく走っている。一駅も停まらないうちに、かなり登っているようだ。

沿線は民家はまばらで田畑も言い訳程度だ。周りは笹の木に囲まれている。そんな中、ポツポツと茶畑が現れる。

十数分走って、一つ目の南宍道を通って加茂中に着く。山の中だから駅間が長くなるのは仕方ない。ここで若干地元の人への入れ替わりがあった。

ここから列車は東に向いて走る。まっすぐ木次方面へ抜ければ3分の1だいたいくらいの距離で済みそうなのだから、相当な回り道である。これは途中の出雲大東のある大東町に寄るというルート設定のためのようである。



東川という小さな川に沿って、出雲大東に着く。使われなくなったレールを外して、そのスペースに紫陽花などを植えており、駅の雰囲気もよく好感が持てる。さっきまではっきりしない天気だったけど、もうすっかり晴れてきた。再び西に戻って9時40分、木次に着いた。失礼ながら意外にも広く、側線も7、8本ある。

さて、指定券を持っていないので、構内に残ってみても仕方がない。とりあえず改札を出る。駅員に切符を見せながら、

「おろち号」を指差して、
「やっぱりいっぱいですよ？」

と尋ねる。答えは、

「そうですね。満席ですね」

やはりそうか、とここまでやって駄目なら木次での2時間をのんびり過ごすのも悪くないなと気持ちを切り替えようとしたとき、

「お客さん、車掌に聞いてみると、いけるかもしれませんよ」

正に天の声であるが、そのアドバイスに浮き足立って車掌に聞いてみたところでどうなるものでもなかろう。でも、あるいはデッキで立ったまま乗せてくれるのかもしれない。ともあれ、半信半疑で改札を通る。

「おろち号」の車掌にかくかくしかじかでと聞いてみる。すると、

「どうぞ。この車両のどこでも好きな席にお座りください。ただし、指定席に相当する料金は頂かないといけません」



と二つ返事で普通の客車の座席をあてがってくれる。元々払うつもりだった指定席料金の500円くらいはこの際何ともない。それに500円で広島の到着が2時間ほど早くなるのであれば、惜しくもない。

車掌の話では、この「おろち号」は12系客車を改造した2両編成で運転されていて、そのうちの1両がメインのトロッコになっている。あとの1両は「控車」と呼ばれるトロッコの乗客の休憩用車両だという。つまり、「控車」1両は回送状態で繋がれているわけである。そういえば、この列車は毎日運転の定期の普通列車を運休にして走らせているのを思い出した。観光列車のために地元の足を奪うこともできないから、指定席料金さえ払えば乗ることができるよう配慮されているのだろう。でも、普段は乗車券だけで乗れるものに地元の人まで料金を払っているのだろうか。

私にとって、これは渡りに船である。乗らない手はない。回送同然だけに車内はもちろんガラガラで、どの席に座ってもフリーだからこちらのほうが好きに写真を撮ったりできていいかもしれない。



9時39分、「おろち号」が発車する。先頭にトロッコ、次に私を含めて数人の乗る「控車」、最後部にDE15ディーゼル機関車と並んでいる。ディーゼル機関車が一番後ろということは推進なのだろうか。でも、トロッコにも運転手がいたから下りのときはトロッコで、上りのときに機関車で運転するのかもしれない。といっても、トロッコに動力が付いているのかどうかは分からない。

ひのぼり

日登を出ると、急にトンネルが増えてく

くる。斐伊川の支流の久野川の細い流れに沿って走る。列車は勾配とカーブの続くところをゆっくりと登っていく。先ほどのキハ120とは比較にならないほどの鈍足である。

下久野を出て少し行ったところにある下久野トンネルが木次線では一番長いトンネルだそう。締め切った窓の隙間からひんやりした空気が入ってくる。トロッコだとともに風を受けて寒いに違いない。私の乗る「控車」とは、そういう場合の一時避難のための車両でもある。

そのトンネルを抜けると、久しぶりに大きな集落に入って出雲八代に着く。でも、駅舎は木造で旧態依然であり、駅名標も30~40年前のそのままである。石を積んだ向かいのホームなどは夏草が生い茂り、朽ちかけている。まるで廃駅の雰囲気だ。そんな駅から数人の乗客があった。やはり、私と同じ扱いで500円を支払ってこの車両に乗ってくる。

水のしたたる音と静かな音楽がスピーカーから流れてきた。山の中の川に沿う木次線のイメージとしては合っているので違和感はない。



出雲三成では宍道行きの列車と行き違う。その列車に大勢の人が乗り込んでいる。こんなに利用客がいるのかと思うほどだ。駅舎は近代的で木次線には似つかわしくないけど、主要な町なのだろう。この駅舎は2年前に建て替えられたという。

ここからわずかだが、列車は再び斐伊川に沿う。川の流れと同様にのんびりと走って、かめだけ 亀嵩に着いた。鮎川哲也氏のミステリー「砂の器」の舞台であり、駅舎内に蕎麦屋が入っていて、手打ちの出雲蕎麦を駅で販売していることでも有名だ。

列車が到着すると、ホームに出て蕎麦を売りに来てくれるのがあるありがたい。私も一つ買う。まだ時間が早いので、これはお昼用に取っておく。ほとんどの乗客が買っていたから、かなりの量が売れたと思われる。ホームの向こうに見える駅舎の中では店の主人が打ちたての蕎麦を切っていた。

トロッコに飽きたのか寒くなったのか、何組かの人がこちらの車両に移ってきた。周りが開けてきて10時50分、出雲横田に着く。木次線随一の駅だけど、この列車自体が観光列車なので乗る人はあっても降りていく人はいない。

出雲横田の次の八川でも手打ち蕎麦を売りにきた。買う人はあったけど、亀嵩のあとではどうもインパクトが弱い。でも、逆に上り列車ならこちらのほうが売れているのだろうと思う。



列車は鬱蒼としたところを黙々と走って、出雲坂根に着いた。これからが木次線のハイライトで、この先に3段式のスイッチバックがある。つまり、出雲坂根駅も含めて2度方向を変えながら勾配を登っていくのである。ここで数分停車する。

その停車時間を利用して、ホームの脇で沸いている「延命の水」のほうへ行ってみる。長い行列ができていて、中にはポリ容器を持っている人がいる。これにはさすがに付き合いきれないので飲むの

は止めにした。前に来たときに飲んだからいいことにする。

列車は反対に動き出して、先ほど通ってきたレールを下に見ながら登っていく。山肌を

縫うように、ゆっくりと力強く登っている。窓を開けてビデオを回していると、頬に当たる風が心地よい。

線が尽きて、再び方向を変えて走り出す。少し行くと、木々の間から出雲坂根の駅舎が小さく見える。こんなに登ってきたのかと驚くばかりである。かろうじて人がいるのが分かる程度の小ささだ。

その眼下の出雲坂根駅前には車が数台停まっているのが見える。先ほど、「延命の水」に並ぶ列を見て、駅には「おろち号」しか停まっていないのに、やけに人が多いし、わざわざポリ容器を持ってくる旅行者もいるのかと思っていたのだが、どうも大半は車で来た地元の人のようなのである。

短いトンネルをいくつも抜け、ときどき坂根トンネルなどの長いトンネルもあり、まだまだ登っている。すると、右手に赤い鉄橋のようなものが見える。国道314号線の「奥出雲おろちループ」と呼ばれる大ループ橋だ。ほぼ同じくらいの高さを走っている。よくこんな高い所に立派な橋を架けられたものだと感心する。



こんな山の中でも田んぼはある。でも、もう8月も半ばだというのに、まだ穂が垂れていない。品種が違うのかもしれないけど、早ければそろそろ収穫が始まるこの時期にこの状態では収穫具合が気になる。冷夏の影響だろうか。実際、今日も暑くないどころか凌ぎやすいくらいだ。

12時が近いので、今から蕎麦を食べる。麺はコシがあり、出汁もコクがあって麺によく絡んで美味しい。でも、量が少なすぎた。もう一つ買っておけばよかったと後悔する。

みいのほら

スキーで有名な三井野原も雪がないとただの田舎の風景だと思いながら見ていると、右手から西城川が寄り添ってきて、間もなく備後落合だというアナウンスが流れる。川辺には紅葉が並んでいる。秋には赤く色づいた中を駆け抜けるのだろう。この列車が春から秋にかけての週末に運転されるというのも頷ける。

さらに進むと、今度は右手から坂根のスイッチバックのようにレールが現れて、12時07分に終点の備後落合に着く。

8年ぶりの再来である。私の好きな駅の一つで、今では無人駅となり、駅舎や構内はひっそりしている。でも、山の中の駅にしては比較的広い構内で、側線は4、5本あり、ホームも3つある。ただ、





駅前や周辺は民家が10軒ほどあって、その横を西城川が流れているだけの何もない駅である。

木次駅では乗れるかどうかの交渉をしたから、「おろち号」をまともに見していない。ここで落ち着いて何枚か写真を撮る。ここでは客車側から撮ってみたけど、動力は積んでなさそうである。あとで調べると、備後落合行きはやはり推進運転だった。「おろち号」の撮影のあとは、改札を出て駅舎なども撮る。

「おろち号」が12時28分に折り返し木次行きになって出ていくと、既に11時15分に到着している落合着のキハ120がポツンと停まっているだけだ。この列車が12時45分発の三次行きで、しばらくするとドアが開いた。「おろち号」の客のほとんどはこの列車に乗り継いでいる。西城川を見たいので、進行方向の右側に座る。

12時45分、時間が来て発車。ゆっくりと動き出し、右へ木次線が分かれて、すぐにトンネルに入った。これから8年ぶりの芸備線である。

やはりトロッコ列車とは走りっぷりが違う。観光的要素が強く、どちらかというとゆっくり走るトロッコ列車と比較すべきではないけど、スムーズな加減速や波に乗ったときのスピードは気動車を感じさせない。まだまだ力を出し切っていないようにも感じる。



ひばやま

最初の停車駅、比婆山に着く。名前もそうだが、なんともうらぶれた雰囲気ひばやまの駅だ。ホームは朽ちかけていて、乗り降りなどあるのだろうかと思うような駅である。

次の備後西城では少し乗ってくる。かつての急行停車駅だから、利用客も多いのだろう。このように駅毎に徐々に増えていって、三次で乗り換えるときはかなりの人数になっているのだろう。

平子の手前辺りから開けてきて、民家も増えてきた。それでも、駅はひっそりとして風こ情がある。なかなかいい風景なのだが、この辺りから居眠りを始める。高の4分停車では目が覚めたけど、またまどろんで、気が付くともう備後庄原の手前であった。昨夜からの強行軍を考えると、居眠りも仕方がない。

庄原はさすがに乗り降りが激しく、乗客がかなり入れ替わった。駅舎寄りのホームは広たいしゃくきょうめで市の中心駅に相応しい風格のある駅で、帝釈峡などへの入り口でもある。帝釈峡へは以前から行ってみたいと思いながら、なかなか実現しない。

下和知の周辺は田んぼが広がっている。その分、山は少し離れてきた。三次盆地に入ったのだろう。珍しく島式ホームなので、列車の行き違いができるのかと思ったら、片方の



レールは剥がされている。本数が減ったためだろうけど、痛々しい姿である。

その下和知を出てしばらくすると、大ばせんきく右にカーブする。馬洗川を渡ると、福塩線と合流する。まるで去年の秋に乗った鹿島線から成田線に合流するシーンを見ているかのようだ。着いたところが塩町だが、分岐駅とは思えない寂しい駅だ。

列車は馬洗川に沿って、盆地の只中をのんびり走る。盆地だから広い土地が取

れそうに思うのだが、さっきから島式ホームや片側1面だけのホームが目立つ。そんな駅がいくつか続いて13時58分、三次に着いた。

次はわずか3分接続の広島行きで、今日の汽車旅はこれで終わりとなる。キハ47の2両編成で、なんだかホッとす。でも、3分停車ゆえに窓際にはもちろん座れず、クロスシートの相乗りとなる。

三次駅はこの辺りでは要衝だけに10本ほどの側線を有する広い構内を持っている。その側線には列車がいくつか足を休めている。庄原方面の奥のほうにはターンテーブルが見え、蒸気機関車時代の遺構が残っているのも好ましい。長いホームの広島寄りの端っこには14時18分発の三江線の口羽行きくちばの列車が発車を待っている。

14時01分発車。しばらく三江線と併走して分かれると、もう西三次に着いた。すると、いきなり4分も停車する。ここで待つくらいなら三次の発車時間を遅らせればいいのにと思っていると、グリーンのストライプに身を包んだ急行「みよし4号」が2両の軽快な編成で駆け抜けていった。西三次の周りには工場や倉庫らしい建物が並んでいて、それ用の引き込み線の跡などもあって、少し広めの駅のようなだ。

列車は右手に大きな江の川を見ながら走る。ローカルな駅が続き、ローカルな風景が車窓に展開する。水田、緑の山々、黒や柿色をした屋根の農家など日本の原風景を見るようである。

急行停車駅である甲立こうたちは鉄筋コンクリートの立派な駅舎で、乗客も入れ替わる。でも、近代的過ぎて周りの風景とあまりマッチしていないように感じる。甲立を出ると、江の川は離れていった。芸備線が沿って走っているうちに写真を撮りたかったけど、窓際に座っていないし、こうも乗客が多いと移動するのもはばかりるので、眺めるだけであった。

昔ながらの商店の建ち並ぶ情緒溢れる吉田口を過ぎ、向井原に着くと大勢乗ってきた。これで席はほとんど埋まった。

志和口に着く。志和口は急行「みよし」の広島からの最初の停車駅である。この間の所要時間は約40分で、これほどの時間をノンストップで走るといのは近頃では特急でもなかなか見かけない。他に大きな町がないのかもしれないし、区間運転が多く設定されているので、停車駅を設けていないのかもしれない。そんな志和口だけど、駅自体はあまり大きくない。駅舎にしても保線区の詰所を持つ構内にしても駅前にしても、急行停車駅としては問題はないのだが、なにやら普通の通過駅のように、本当にここに急行が停まるのかと思うような駅である。もう少し活気があるのかと思ったけど、時間帯が悪かったのだろうか。右手に白木山が見えてきた。

かるが

狩留家を過ぎた辺りからまた居眠りをする。ほんの数時間前にまどろんだところなのに、まぶたが重たいのだろうか。太田川をおぼろに見て、短いトンネルを2本抜けたのを夢心地で感じながら気が付くと玖村であった。3、4駅分は寝ていたことになる。

山陽道をくぐって安芸矢口を出ると、いよいよ広島が近づいてきた。徐々に家が増え、ビルが増え、田畑が減ってきた。区間運転のエリアに入ったので、列車行き違いも増えてきた。そして、どの列車も多くの乗客を乗せている。

15時33分、広島に着いた。どっと乗客を吐き出して、それに流されるように列車から押し出される。これから堀越君と会って広島の観光だ。広島駅南口の改札を通ると、いつもの元気な声で、

「おう、久しぶり！」

と声を掛けてくる。

堀越君は我が紀行文には初登場であるが、大学を出て初めて入った職場の元同僚である同僚だった期間はわずか2～3ヵ月程度ではあるけど、それ以来10年の付き合いが今なお続いている。今でも堀越君の帰省時に他のメンバーとともに集まって旧交を温めている。

「どこ行く？」

当然の質問である。さきほど木次線の車内で携帯電話で聞かれたときには成案がなかったけど、今は地図を見た後だから候補はある。

「原爆ドームと広島城」

「どっちがええ？」

こう来られると、他に用意していた比治山公園は消えてしまう。でも、広島城を含めた3ヶ所のプランはあくまで車で回ることを想定してのことだったのだが、堀越君の話を聞いた感じではどうも車ではないらしい。

「何で来たん？」

「バス」

「じゃあ、移動はバスか市電か？」

「うん、ドームも広島城も市電で同じところで降りる」

鞆をコインロッカーに預け、身軽になって市電の乗り場へ向かう。近頃はやりの低床の電車が多く見られる。もはや旧式に取って代わって主流になっているのだろう。でも、きれいな車体と車内は気持ちがいい。もっとも、オールドファンには由々しきことかもしれない。

低床だから乗りやすい。お年寄りや子供でも簡単に乗り降りができる。市内を走る路面電車は均一料金で150円だ。そのためか、夏休みだからか、お盆だからか乗客はたくさんいる。

広島の繁華街のど真ん中を悠然と走る。私のような四国から来た田舎者には広島のような都会はどこまで行っても「街中」なのだろう。広島ではどこまで行っても人も車も多く行き交っているように思える。紙屋町西で降りる。

降りたところも大勢の人がいる。右手には広島市民球場があり、左手には原爆ドームが見える。





「今晚、カープの試合があるぞ」
「おお、ええなあ。公式戦や随分見てないわ」

「たまにはええやろ。どっち行く？」
と、市電に乗る前と同じことを聞かれて、
「そうや、今日は終戦記念日やん。ドームへ行かな」

そういうわけで原爆ドームへと向かう。今日が何の日か今まで忘れていたとは、日本国民として恥ずかしいことだ。

ドームの周りには多くの人が出て、一様に写真を撮っている。その傍らでは反戦集会か語り部による戦争体験を聞く集まりか、いくつかの人だけりかできている。原爆ドームは原爆にも耐え、60年近い年月の風雨にも耐えて西日をいっぱい浴びて聳えている。

いろいろな角度から写真を撮り、続いて広島平和記念資料館のほうへ行くことにする。もう16時が来ようとしているのに、この暑い中をたくさんの人が往来している。木次線でのさわやかな空気が嘘のようだ。

原爆ドームから資料館まで約500メートルはあるだろうか、元安橋を渡り、先日学生によって千羽鶴を放火された原爆の子の像を右手に見ながら資料館への一本道に入ると、炎が燃え盛っている。

「これが『平和の灯』でこの炎は消えることがないんや」

「それは聞いたことがある」

「で…」

堀越君の向かった先にはトンネルのようなモニュメントがある。

「これは死没者の慰霊碑や。ここから平和の灯と原爆ドームが見通せるんや」

まっすぐに一本の筋になっている。原爆の恐ろしさと戦争の空しさを物語っている。やはり8月15日という日は我々がけっして忘れてはならない特別な日である。

記念館に着くと、まだまだたくさんの人が食い入るように見ている。入場券を求める。といっても、堀越君が買ってくれたのだが、何と言っても安い。わずか50円で入場できるのだ。乳幼児の値段でなければ、障害者や被爆者の人の値段でもないれっきとした一般の大人の入場券である。

「安いなあ」

「そやろ？」

「びっくりしたわ」

多分、広島から世界に向けて戦争の愚かさや原爆のすさまじさなどを発信するという広島県民の気持ちの表れではないか。少しでも多くの人にこの現実を知ってもらいたいから、気兼ねなく見られる価格設定にしているのだろう。お金など問題ではないといった気概を感じる。

堀越君が、

「俺は何回か見に来とるけん、まあゆっくり見て回ったらええわ」



と言うので、お言葉に甘えてゆっくり見ることにする。

入り口にビデオが流れていて、まずみんなこれに釘付けになっている。私もそれにつられて見る。途中からではあったけど、生々しい映像が来場者の気持ちを厳粛にさせている。

ビデオを見て先へ進むと、幕末や明治初期から原爆投下までの広島を様々なパネルや資料で紹介しているコーナーに入る。私の知識では広島県は呉に軍港があるということくらいしかなかったけど、実は県全体が国や軍の直轄のような県になっていて、日露戦争時には明治天皇が広島に下って臨時議会を開いたということが記されている。

その辺りまでは歴史の好きな私も興味深く見ていたけど、それが終わると、資料は原爆投下の計画や作戦、投下後の広島の姿、原爆症に悩む人々といった、この資料館のメインの資料が続く。原爆関係だけで3分の2以上はスペースを割いていると思われる。

始めのうちは、

「さすがは広島やの、大都市は昔から違う」

などと軽口を言っていたのだが、原爆の資料に入ると次第に口数も減り、うめくような感嘆詞ばかりになる。周りの人も黙って見ている。言葉では言い表せないのだ。何か感想を述べろと言われても、かえって陳腐な表現になりそうで、それが言葉を奪っているようでもある。

「げんなりしてきた」

「かなりすごいやろ」

「怖すぎるわ。気持ち悪うなってきた」

「恐ろしいやろ」

約1時間半、たっぷりと見学した。時計はもう18時を指している。資料館だけでも十分よかった。というより、他を回りながらだと集中できなかったに違いない。

さすがに18時ともなると、平和公園を歩いている人の数もかなり減ってきている。元来た道に戻ると、原爆ドームの向こう側に広島市民球場が見える。

「ちょうどええ時間やけど、行く？」

「そやのお…」

周りには赤いメガホンを持った子供たちが両親に手を引かれて球場へ向かう姿が見られる。行ってもいいなとは思いつつ対戦相手を聞いてみた。

「横浜や」

昨日8月14日現在で5位と6位の対戦である。今年のプロ野球セントラルリーグは1位と6位がほぼ決まっていて、間の2位から5位までの4チームにほとんど差がなく、現在5位の広島も十分3位以上のAクラスに入れるから、広島ファンにとっては応援したくなる成績だ。私も広島というチームは嫌いではない。でも、かつてほど好きなわけでもない。

「5位対6位の対戦か。ちょっと盛り上がるんの」

「やめとく？」

「時間が読めんし」

「じゃあ、お好み焼でも行くか？」

「あ、忘れとった。それは何をおいても行くわ」

堀越君はどちらかという野球よりサッカーのほうが好きで、もし、今日Jリーグと野球の両方で試合があったなら、サッカーに誘われていたかもしれない。今日は金曜日だから、Jリーグの試合は元々ないが、広島でサッカーといえば、サンフレッチェ広島だ。J1でステージ制覇もしたことがあるチームだが、今は2部のJ2でJ1復帰をかけて熾烈な争いを演じている。そういうわけで、堀越君のほうも野球には特に執着していないから

私に強く勧めることもない。横浜球団と横浜ファンの方には誠に申し訳ないのだが、私もこれがたとえば横浜を除く他の4チームとの対戦だったら球場に足を運んでいただろう。

店を捜しながら広島街を歩く。途中、電器店やサンフレッチェの専門店などに寄る。蒸し暑い中を大勢の人が歩いているので、余計暑く感じる。でも、暑さに比例して、女性の肌は極限まで露出しているのだから、男性諸氏の目を楽しませてくれる。

7時ともなると、だいぶ暗くなってきて飲食店の中も席が埋まりつつある。堀越君は「このラーメン屋はうまいんや」

「ここは行ったことないけど、よう流行っとる」

などと地元情報を懇切に説明してくれる。

そして、「へんくつ屋」という名のお好み焼き屋へ入る。広島市内に12店舗を持つ老舗で皇室にも献上したことがあるという。皇室とお好み焼きはどうにも結びつかないけど、由緒ある店ということなのだろう。

あいにく満席で少し待つことになったが、私たちが行列の先頭になる。しかし、ただ待たせるのではなく、事前に注文を聞きに来た。これは嬉しいサービスだ。しばらくすると次々と数人ずつの団体がやって来る。気が付くと、15名ほどの行列になっていた。隣には「元祖へんくつ屋」があり、これは姉妹店だ。元祖の店員が私たちの行列の最後部の人たちに同じ系列だということを告げて、店に入れてくれる。これで待ち時間も少しは分散される。

15分ほど待って、店員に促されて店に入る。カウンターに腰を下ろすと、程なく注文の品が出てくる。事前注文の成果だ。ビールを頼んで乾杯する。

表面はカリッとしていて、中のそばも適度に香ばしい。ソースもいい具合に効いていてなかなか美味しい。お好み焼もビールもあつという間になくなった。注文を「普通」ではなく、「大」にすればよかったと少し後悔したけど、味にはたいへん満足した。堀越君は奥さんへのお好み焼を買って店を出た。

それからしばらく市街を散策して、広島駅に戻る。鞆を取り出してバスに乗り、堀越君の家に向かう。

堀越君はこの春に結婚したばかりで、そんな中お邪魔をするのは大変恐縮するのだが、彼が広島へ行ってもう7、8年になるのに実は今回が初めての訪問となる。いつも広島への向こうの山口の楠君のところへばかり行って、申し訳なく思っているけど、とにかく今回が初めてである。

バス停から降りて5分程だんだらの坂を歩くと、立派なマンションがある。そこが堀越君の住んでいるマンションである。初めて行く家というのは、大なり小なり緊張するものだ。まして堀越君だけではなく、奥さんもいるからなおさらだ。

家に招じ入れられると、奥さんのお出迎えを受ける。奥へ入ると、観に行かなかった広島ー横浜戦がテレビ中継されている。広島ケーブルテレビでは広島戦を試合終了まで中継してくれるのだそうだ。さすがは地元である。時間は21時前で、もう試合は終わろうとしていた。結果は広島の勝利で、野球はどっちでもいいとはいいながら、3人ともテレビに釘付けになっていた。

一番風呂を頂戴して落ち着くと、買って来たビールを飲む。

「堀越君、新婚生活はどう？」

「いやあ、まあええかな」

「だいぶ慣れた？」

「そうやな」

「休みの日なんかは毎週どっか行くん？」

「サッカー観に行ったり、買い物行ったりするわ」

「うちはもう買い物は一緒に行かん。でも、ときどき家族でイベント行ったり、年に一回行く旅行もちゃんと段取りして行くよ」

「仕事は総務をやり始めて、きつうなった？」

私はこの春から従来の営業に加えて、総務の仕事もすることになり、仕事量は倍以上か二乗くらいに増えたのではないか。そこまでオーバーでなくても少なくとも拘束時間は長くなったから、心身ともにこたえる。

「まあ、朝が信じられんくらい早よなったんが、大きいわ。なんせ落ち着いてするためには誰も来てないときしかできんけんの」

「何時？」

「早いときは6時半、遅うても7時過ぎには行く」

「で、終わりは？」

「だいたい8時」

「それはきついわ」

「堀越君もきついって言いよったやん。深夜までやっとなやろ？」

「そうや、最終で帰ることもようある」

「たまらんな。ずっと、パソコン相手やろ？」

「うん、結構疲れる」

「パソコンでなくてもその時間までやっとなら、誰でもえらいわ」

こういうもろもろの話を3人で遅くまでして、1時くらいに床に就いた。

「陰陽ローカル線泣き笑い」の続きを読む